

JSL 児童が在籍学級の学習に参加するための日本語

—教室談話と教科書の語彙分析の結果から—

森 篤嗣（京都外国語大学） 齋藤ひろみ（東京学芸大学） 田中祐輔（東洋大学）

1. 本パネルセッションの趣旨説明

本パネルセッションでは、JSL 児童が在籍学級での学習に参加するために必要な日本語について、教科書と教室談話、そして日本語と内容の統合学習という三つの観点から検討する。

教室における学習（授業）は、多くの要素からなるが、その中でも教師、児童、教材の三つは主要な要素であると言える。教室という環境における日本語について、教材、教室談話、統合学習という三つの観点から多面的に JSL 児童が在籍学級の学習に参加するための日本語について検討を行う。

2. JSL 国語教科書語彙シラバス

2.1. 帰国児童・外国人児童の増加と対応の必要性

グローバル化の進展に伴い、我が国の在留外国人数は 223 万人を超えている（法務省、2016）。外国人児童数は 10 年で 1 割以上増え、日本語指導が必要な日本国籍児童も 10 年間で倍以上に増加している（文部科学省、2015）。我が国で学ぶ児童が等しく学習機会を得るために、日本語支援拡充が不可欠と指摘されている（文部科学省、2014）。

2.2. 極めて重要な“全ての国語検定教科書の掲載語調査”

こうした状況下において我が国の言葉を学ぶ国語科は極めて重要と言えるが、実際には 10 教科の中でも特に困難が伴う教科とされ（文部科学省、2010）、帰国・外国人児童の学習語彙不足が教室参加に支障を来しているという。とりわけ、授業の根幹を成す国語教科書が母語話者を前提としているため、理解できない帰国・外国人児童には JSL (Japanese as a Second Language) 教育として取り出し授業を行わざるを得ない。また、仮に取り出したとしても、第一学年から第六学年までの国語教科書掲載語が把握されていないため、実際の国語科の教育内容と連動した日本語支援は困難であり、帰国外国人児童をいつまでも在籍学級の授業に戻すことができない問題が指摘されている（妹尾、2014；文部科学省、2015）。国語教科書に掲載された語彙は、言い換えれば国語の習得に必須となる語彙でもあり、全ての国語検定教科書の全学年の掲載語を把握するための調査と考察が喫緊の課題となっていると言えるのである。

国語教科書の掲載語は、一見すると各教科書に一覧が記載されているようにも思われるが、いずれの教科書にも全品詞（名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞・代名詞・感動詞・接続詞・接頭語・接尾語・連体詞・連語・造語・慣用句）を網羅したリストは存在せず、教育関係者が各教科書を横断的に調べる等、日常的に利用できる形で公開されてもいない。単元で扱われている語や漢字が脚注や索引などで提示される場合でも、新出語や重要語など部分的な記載に留まる。加えて、ある程度語彙力のある日本語母語児童を前提とした基準で記載されているため、帰国児童・外国人児童への JSL 国語科教育には十分ではなく、国語検定教科書掲載語の全体像と実態は捕まえない状況であることが指摘できるのである。

そこで本研究は、手始めに小学校第一学年の全ての国語検定教科書の掲載語調査を行い、国語科教育を受ける初期段階に必要とされる語彙知識の特徴を明らかにした上で、小学校第一学年のJSL児童への日本語学習支援における語彙シラバスのあり方について考察する

2.3. 第一学年の国語教科書と初級総合日本語教科書の全数調査

本研究の内容と方法として、1) まず、現行の小学校第一学年の全ての小学校国語検定教科書10冊(光村図書出版・三省堂・東京書籍・学校図書株式会社・教育出版)に掲載された語のデータベースを田中(2016)に基づいて作成し、教科書別、単元別、教材(作品)別、出現頁、出現箇所別、品詞別にコード付けと集計を行う。2) 次に、各語項目の各教科書における出現頻度、各語項目の全教科書における出現頻度、全教科書に出現する語項目、過半数の教科書に出現する語項目、各教科書特有の語項目について考察し、小学校第一学年JSL国語教科書語彙シラバスの特徴を明らかにすることで、どのような語彙指導が効果的かを検討する。3) 田中(2016)で取り組まれた日本語初級総合教科書の結果と照らし合わせ、小学校第一学年JSL国語教科書語彙シラバスと初級日本語総合教科書語彙シラバスとの異同から、その特色を確認し、JSL児童への日本語学習支援に際し、国語教科書と日本語教科書との連携のあり方について提言する。4) 公開されている日本語能力試験(旧試験)級別語彙リストと照らし合わせ、小学校第一学年JSL国語教科書語彙シラバスと日本語能力試験出題基準との異同から、その特色を導き出す。

2.4. パネル・ディスカッションでの提言

結果、1) 全5種の教科書延べ語数36,102のうち、ユニークコード(異なり語数)は6,111である。また、教科書出現頻度がもっとも多い10項目とその出現回数は、「こと(576)」「かく(477)」「する(473)」「よむ(423)」「いう(264)」「え(264)」「ある(256)」「ことば(248)」「なる(246)」「かんじ(223)」であることがわかった。2) 国語教科書掲載語彙(6,111項目)のうち、全ての教科書に出現した語は465項目(全体の7.6%)、過半数の教科書に出現した語は1,230項目(全体の20.1%)、1種の教科書にのみ現れた語は3,996項目(全体の65.4%)であることがわかった。3) 国語教科書掲載語彙(6,111項目)のうち、日本語教科書掲載語彙(8,305項目)と重なるのは、2,172項目であり、重なり率は35.5%である。また、5種の国語教科書全てに出現した語は465項目である。そのうち、日本語教科書全教科書掲載語彙138項目と重なるのは88項目であり、重なり率は18.9%である。4) 国語教科書掲載語彙(6,111項目)のうち、旧日本語能力試験出題基準語彙(4級~1級、10,054項目)と重なるのは、2,718項目であり、重なり率は44.5%である。重なりの内訳として、4級701項目、3級466項目、2級1,186項目、1級365項目となっている。

本パネル・ディスカッションでは、以上の結果を踏まえた考察を行なった上で、JSL児童への日本語学習支援における語彙シラバスのあり方について提言する。

3. JSL児童の在籍学級でのコミュニケーション行動

3.1. 「取り出し指導」と「入り込み指導」

JSL児童に対する指導形態として「取り出し指導」と「入り込み指導」がある。特別の教育課程のもと、「取り出し指導」については、事例も多く報告されるようになった。特別の教育課程以前も「取り出し指導」は、全国各地でおこなわれていたわけであるが、特別の教育課程をきっか

けに情報共有の場が多くなったことは大変有意義なことである。

その一方で「入り込み指導」についてはどうだろうか。もちろん、実践は全国で数多くおこなわれている。しかし、担任教師と日本語指導者はそれぞれ眼前の課題を解決することに追われており、JSL 児童の在籍学級でのコミュニケーション行動にどのような共通する困難点があり、どのような方法でその困難を乗り越えて成長しているかについて分析することは簡単ではない。

3.2. 参与観察によるフィールドノート

それを解決する一つの方法が、第三者（研究者や大学院生・大学生など）の参与観察による記録である。昨今の個人情報保護の観点から、日本の学校教育現場においても、第三者による録音・録画は難しくなりつつある。しかし、参与観察におけるフィールドノートであれば実行可能なことも多い。

JSL 児童の指導に関する研究は盛んになりつつあるが、教育現場のデータを取得しておこなうという点では、まだまだ至らない点も多い。日本語教育関係者が積極的に学校教育現場に関わっていくという方向性が必要だろう。

本発表では、JSL 児童の在籍学級において、JSL 児童と教師、JSL 児童と日本人児童、JSL 児童同士のコミュニケーション行動計 10 時間の参与観察と、それを補足する取り出し指導での参与観察のフィールドノートから分析をおこなう。

3.3. JSL 児童の在籍学級での「つまづき」

本発表では JSL 児童の在籍学級でのコミュニケーション行動を観察した結果を報告していく。まず全体として、一対一ないし少数での「取り出し指導」とは異なり、在籍学級での授業の場合、JSL 児童の発言数はかなり限られることとなる。したがって、10 時間の参与観察といっても、JSL 児童が関わるコミュニケーション行動場面はそれほど多くない。さらに言えば、そのコミュニケーション行動場面においても、多くの JSL 児童はほぼ問題なく課題を解決する。かなり長期にわたる参与観察をおこなわなければ、「つまづき」の抽出は難しいというのが実感である。

今回の発表では参与観察で得た「つまづき」と思われる部分を紹介するが、紙幅の都合上、ここではその一部の概略のみ示す。

- ▶ 小学校 4 年国語：「ある秋のことでした。二、三日雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました」について感じたこと。A さんは「テンションが低い、いたずらできない」と答え、そう感じた理由として「穴から出られない。雨がきらい」と答えた。そこに教師が「がまんの限界なんだね」と A さんの発言を解釈して声をかけた。A さんはもう一度「理由はもうがまんできないから」と繰り返す。→このケースで「がまんの限界」を提示するタイミングはこれでいいか？A さんは教師の「がまんの限界」という表現を理解したか？納得しているのか？
- ▶ 小学校 4 年国語：教師が「10 ページの 8 行目から読んで下さい」と指示。B さんは戸惑う。教師はもう一度「10 ページの 8 行目、下のちょんって数字見て」と指示。B さんは対応できない。周囲の児童に教えてもらって解決。→「ページ」や「行」という概念がうまく把握できていない。物語の冒頭から行を数えないといけないと思っていた？
- ▶ 小学校 5 年国語：「注文の多い料理店」で「紳士」の言葉の意味を問われる。C さんは「旅館の人」「ホテルの人」と答える。→文化的な問題？個人的な認識の問題？

- 小学校5年算数：かなり難しめの分数の問題を班の人に説明する。Dさんは当初は「わかった」と自信ありだったが、実際に説明してみてクラスメートから質問を受けると自信がなくなり引き下がってしまう。→日本人児童同士でもあること。母語でないことの影響は？

4. 日本語と内容の統合学習

国内の子ども対象の日本語教育においては、1990年代後半よりCBI(Content-Based Instruction)が紹介され、2003-07年にかけて文部科学省が開発した「JSLカリキュラム」によって、「日本語と教科の統合学習」という考え方が学校の日本語指導に取り込まれるようになった。教科内容の理解のための探究活動を文脈として、目標言語を運用する経験を構成することである。

日本語と内容の統合学習を実施する教師には、子どもの実態の把握・分析、教科内容の分析、その内容(教科)学習で用いられる日本語の分析の力が求められる。そのための有益な情報が「教科書の語彙」「教室内のコミュニケーション」である。しかしながら、語彙や表現を文脈から切り離して説明したとしても、その学習内容の理解を促す学びの経験にはなりにくい。子どもたちが考え、判断し、表現する活動を、ことばを伴わせて経験させることでことばの学習は成立する。

5年生の算数の問題「250円のマジックペンを30%引きの値段で買いました。代金はいくらですか。」(単元「百分率」)という問題を、「もとにする量」「比べられる量」「割合」という用語で説明し値段の求め方を考える学習の場合はどうであろうか。絵図や数直線等を利用した半具体物による操作活動を経て、随意的なことばとして「もとにする量」などを利用することができるようになる。発表では、実際に参観した統合学習の授業の例を示しつつ、「教科書の語彙」と「学習時のコミュニケーション」からの示唆をどのように教授活動に活かしていくかを検討する。

5. まとめ

本パネルセッションでは、JSL児童が在籍学級での学習に参加するために必要な日本語について、教科書と教室談話、そして日本語と内容の統合学習という三つの観点から検討した。

JSL児童が在籍学級の学習に参加するための日本語に、いま何が欠けていて、何が必要であるかを考えるには、学校教育関係者や日本語教育関係者、研究者や教科書作成者など様々なステークホルダーが共有した認識を持って臨む必要があるだろう。

今後も「いま、ここ」にある問題を扱いつつ、広範囲・長期的な視点も持ちながら少しでも子どもたちの学びが支えられる実践や研究を模索していきたい。

【引用文献】

- 妹尾知昭(2014)「外国人児童への国語科入門期教育の研究」『国語教育思想研究』国語教育思想研究会
- 田中祐輔(2016)「初級総合教科書から見た語彙シラバス」山内博之(監修)／森篤嗣(編)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版、pp.1-27
- 法務省(2016)平成27年末現在における在留外国人数について(確定値)
- 文部科学省(2010)「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について(最終報告)小学校編」
- 文部科学省(2015)「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成26年度)の結果について」